

日常生活史——C氏の場合

「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける
労働者の日常生活」（その三）

宝 福 則 子

はじめに

本稿は、『人文研究』第91輯および第97輯に続く、「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける労働者の日常生活」のインタビュー資料分析シリーズのひとつである。この資料の由来や分析方法等については、第91輯を参照されたい。

当該資料は、1980年3月26日に、C氏のブラウンシュヴァイクの自宅での5時間にわたるインタビューをA4タイプ用紙108ページに書き起こしたものである。

ここで、参考のため、まず、C氏の略歴と両親について簡単に記しておく。

- 1904年8月31日 ブラウンシュヴァイクで誕生
- 1919年—1922年 農家の下男
- 1922—23年 製鉄所労働者
- 1923年 缶蓋付工
- 1923—1936年 給仕人
- 1927—1933年 食糧・飲料労働者同盟
- 1931年9月12日 工場労働者のシャルロツテと結婚

父 1860年にゼーゼンで誕生、1933年ブラウンシュヴァイクで死亡

1874—1925年 葉巻職人として葉巻職人同盟に所属

C氏の母とは2度目の結婚、最初に結婚した妻との5人とC氏の母との結婚による7人の計12人、子供をつくった

母 ブラウンシュヴァイクで誕生，1914年にシュティীগで死亡
未組織の葉巻工場労働者，結婚後は専業主婦，出産7回

1. 両親について

私の父は1960年にゼーゼン *Seesen* で生まれました。彼は、ゼーゼンで国民小学校に行き、1874年に14歳で学校を終えると、一人でブラウンシュヴァイクに出てきて、葉巻職人の職業教育を受けました。私が生まれた時も葉巻職人でしたし、その後もずっと、年金生活に入るまで、ブラウンシュヴァイクのフライ・シューリッヒ社 *Frey & Schurig* で葉巻職人の仕事をしていました。その間、何年頃だったかはわかりませんが、ヴォルフエンビュッテル *Wolfenbüttel* にもフライ・シューリッヒ社の葉巻工場が建ち、その工場ですら2年間ほど働いていたことがあります。父は、毎日、7時に家を出て、夜遅くに徒歩で帰って来ました。しかも、10時間や11時間も労働した後にです。ヴォルフエンビュッテルまでは、12キロの距離があります。2時間かけて、夜の仕事前にも歩いて行くのです。土曜日にも働いていました。革命後に1日8時間労働制になりましたが、それでもまだ8時間以上、働きました。時間外労働をしたのです。そうでもしなければ、私の母の小さな子供達がいまいたから、お金が足りなかったのです。このヴォルフエンビュッテル工場の時期以外は、いつもブラウンシュヴァイクの工場に働いていました。ブラウンシュヴァイクの工場は、最初は、ノイエ通り *Neue Straße* にあったのですが、ここから *Bertramstraße* ベルトラム通りに移転しました。今ここには、ボルン蜂蜜社 *Honig-Born* の工場が建っています。彼には、失業していた時期はありません。彼の属する宗教は、新教でした。教会から脱退はしませんでした。

父は、私の母との結婚の前に、一度、結婚していたことがあります。この最初の結婚で、男の子をひとりと、女の子を4人、全部で5人の子供をもうけています。最初の妻は、離婚後、1900年頃に、アメリカかオーストラリアに移住した後、亡くなりました。彼女が移住する前に離婚していたのは確かですが、正確に何年に離婚したのかは、もう分かりません。最初の妻との離

婚原因は知りません。父が浮気をしたというわけでもありません。まったく、その反対です。当時は、離婚など簡単ではなく、とてもむずかしいことでしたが、彼自身が望んで離婚したわけではなく、彼女自身の意思で出ていってしまったのです。彼女は、子供たちを家に置いたまま、父ひとりに何もかもすべてを押しつけて外国に移住してしまいました。子供たちが小さいので、私の母と2度目の結婚をしたわけです。最初の妻が出ていった時、子供達がまだ小さいので、どんなに大変だったか、昔、父は、よく話していたものです。

私の両親が結婚したのは、今、母との長女のマリーMarieが83歳で、メータがMetaが80歳になるので、1897年頃ということになるでしょう。私の両親に、結婚前に婚約期間があったのか、また、彼らがいつ知り合ったのかも知りません。

父は、当時は葉巻職人連盟という名称でしたが、労働組合に入っていました。葉巻職人と銅板金職人の労働組合が、最初のものでした。これらふたつが、全労働組合の中でも最初にできたものでした。だから、当時、葉巻職人と銅板金職人の労働組合に入っている人々がそうだったように、彼も教会で結婚しなかったのです。

父は、若い時に葉巻職人連盟に入り、そのまま、ずっと長く所属していました。政党では、党员ではありませんでしたが、いつも社会民主党SPDを支持していました。SPDの支持者であったというだけで、その他の協会や団体に所属してはいませんでした。そして、1933年にブラウンシュヴァイクで亡くなりました。1933年に暴風があり、そのために亡くなったのです。死因は、心臓不全で、座ったままで亡くなりました。彼は、すでに病気だったのですが、突然に、ナチ支持者になり、ナチの政権を体験してみたくまりました。というのも、ナチは、何か胡散臭い宣伝をしていたからなのです。彼は、「今まで、私はいつも社会民主党を支持していたけれど、ナチが政権を取ったら、どうなるか見てみたいものだ」と言っていました。しかし、それを見ることなく、その2日前に亡くなりました。彼の生涯の最後の2年間、ナチが宣伝

活動をしていた時に、父は、ナチ側に行ってしまう、支持政党を変えたのです。ナチが政権をとったのは1月30日ですから、1月28日に亡くなったわけです。

私は、両親が結婚した日も、母の誕生日もわかりません。私がかっているのは、母にとって、父が最初の夫で、結婚前に私生児を生んだこともなく、若死にしたということだけです。彼女は、毎年、子供を生みましたが、流産はしていません。

母は、ブラウンシュヴァイクの生まれです。母が私生児として生まれたのか、正式の結婚によって生まれたのかどうかも、わかりません。宗教は新教でした。教会から脱退はしませんでした。母は、私たちの階層の出身で、その中で育ち、国民小学校に通いました。そして工場労働者になりました。小間使いなどはしたことがありません。子供が生まれてからは、主婦でした。しかし、母がどこで働いていたのかは、知りせん。母は、ブラウンシュヴァイク以外で働いたことはありません。母が失業したことがあるかどうか、父がヴォルフエンビュッテルに通っていた2年の間、母が仕事をしていたのかどうかもわかりません。

母は、政党にも労働組合にも組織されていませんでした。その他のクラブや協会等にも加わってはいませんでした。子供が多かったので、その世話に明け暮れていたからです。

1911年に兵隊に行った長男が、一度、退役した後、戦争の初期の1914年に、また兵隊に行きました。その時、母は、「彼が兵隊になるなら、私は死んでしまう」と言ったものです。彼女は自殺はしませんでした。結核にかかり、シュティエーグ *Stiege* で療養し、そこで1914年に亡くなりました。小さい子供をたくさん残して亡くなりましたが、その間に、父の最初の結婚で生まれた姉たちが大きくなっていましたので、父は再婚しませんでした。

私の両親の親、つまり私の祖父母については、まったく何も知りません。

2. 兄弟姉妹について

父の最初の妻との間には、長女のエルゼ *Else* が 1890 年、息子のカール *Karl* が 1891 年に生まれています。その後、年子で、ヘレーネ *Helene*、ミミー *Mimy*、グレーテ *Grete* と続き、それぞれ 1892 年、93 年、94 年生まれです。ミミーは、今、84 歳です。グレーテは、63 歳で亡くなっています。エルゼは、2 年半前に亡くなりました。彼女が今生きていたなら、90 歳くらいでしょう。

その後、私の母との 2 度目の結婚で生まれた、私たち 7 人の子供が続きます。長女のマリーが 1898 年、エミー *Emmy* が 1899 年 8 月 8 日生まれで、昨年 80 歳になりました。3 番目のメータが 1900 年 3 月生まれの 79 歳。私は、1904 年生まれです。アルトゥア *Arthur* が 1909 年、ローター *Lothar* が 1911 年、そしてヘルベルト *Herbert* が 1914 年と続きます。末っ子のヘルベルトを 1914 年に生んだ直後に母は亡くなったのです。私の兄弟姉妹は、皆ブラウンシュヴァイクで生まれました。父は、私生児はつくっていませんし、私生児として生まれているわけでもありません。

母の死後は、父の最初の結婚で生まれた姉たちが、昼間は働き、夜は、家で食事の支度をしたり、その他の家事をしました。グレーテが大部分を引き受けていましたが、大変な仕事でした。母が亡くなったのは、私が 10 歳の時でした。母親がいないので、私が先ず最初にオッテンシュタイン *Ottenstein* の村に行ったのです。姉たちは、その後、父と私たち下の弟たちを残して、家を出て、家具付きの部屋を借りたり、女性寮に入居しました。当時、すでに女性寮というものがありませんでした。ゲルデリンガー通り *Gördelinger Straße* にも女性寮があって、エミーが入っていましたが、教会の女性寮もありました。

グレーテがどんな仕事をしていたのかは分かりませんが、彼女は結婚せずに働き続け、ずっとやはりゲルデリンガー通りの女性寮で暮らしていました。他の兄弟姉妹も働きましたし、兄弟の妻たちも働いていました。アルトゥアの妻がどんな仕事をしていたかは知りませんが、彼女も働いていたはずで

そうでもなければ、私たちは何も持ってはいませんでしたから、暮らしていけなかったのですよ。ローターは、晩婚でした。ローターの妻は、彼と知り合った時は、デュッセルドルフから来た離婚女性でした。彼女のことは、主婦としてしか知りませんが、短期間だけ *MIAG* 社の工場で働いていたことはあります。

ヘルベルトは第二次世界大戦後に結婚しました。彼の妻は、戦後、昔の東プロイセン、つまり、東ドイツから逃げて来たのです。彼女は、そこで農業に従事していました。カールの妻は、孤児でした。結婚前は、シュマルバッハ *Schmalbach* のブリキ製品工場で働いていましたが、結婚後は、働いたことはありません。エミーの夫は、市の清掃人でした。メータの夫は、ケーキ職人でしたが、マイスターではありません。マリーの夫は、機械の組立工でした。マリーは、ブラウンシュヴァイクから出て行きました。夫がデュッセルドルフの大きな工場で働いていたのです。他の姉妹達の夫は、皆、ブラウンシュヴァイクで働いていました。エルゼの夫は、近郊の出身で、まったく単純な炭運びを仕事として、ブラウンシュヴァイクの炭屋で働いていました。ミミーの夫は、修理工と言うべきか、運転手と言ったらよいのか、若い時に運転免許を取って、個人の家の車の運転手をしていたのです。ヘレーネの夫は、ゼーセンの出身で、シュマルバッハ・ブリキ製品工場でマイスターとして働いていました。

私の兄弟姉妹で離婚した者はいませんし、私生児をつくった者もいません。

私は、兄弟姉妹の中では、亡くなったグレーテが一番好きでした。彼女は、異母姉で、私の母親代わりでした。とはいえ、特に嫌いな兄弟姉妹はいません。私の両親の家では、喧嘩などはしませんでしたし、仲が悪い兄弟や姉妹もいませんでした。今、私たちは、毎日、お互いに行き来をしたり、毎月逢ったりすることはできませんが、みんな仲良くしています。それでも、グレーテは、私にとっては特別好きな存在でした。

3. 住居について

私が1904年8月31日に生まれた家は、旧市街のウェーバー通り *Weberstraße* 13番で、8歳まで住んでいました。その後、シャルン通り *Scharnstraße* 16番に移り、1919年に堅信礼を受けた時には、この家に住んでいました。1922年に、ここからオッテンシュタインの田舎に行った時には、警察に届け出ました。そして、又ここに戻ってきたのです。デュッセルドルフだろうと、他の土地だろうと、よそに移る時は、いつも警察に届け出たものです。シャルン通りには、1912年から22年か23年までの10年間、住んでいたこととなります。その後の独身時代は、ハーゲン市場 *Hagenmarkt* の角のカスパリ通り *Casparstraße* 8番に、1931年に結婚するまでの7、8年間、住みました。この家はもう取り壊されていて、残っていません。カスパリ通りでは、一人で暮らしていました。父は、シャルン通りで暮らしていました。

ウェーバー通りの住居は、小さな4部屋からなる小屋のような住居でした。両親と子供たちだけで住んでいました。子供達は大きくなると、家を出て行きましたが、それでも、大体、いつも8人がここで暮らしていたのですから、狭い部屋に押し合いへし合いしていたのです。子供たちは、学校を終えると、家を出ていき、一人ずつ少なくなりました。廊下はなくて、階段の踊り場しかありませんでした。地下室はありませんでしたが、屋根裏の物干し場がありました。トイレは中庭にありました。当時のトイレは、どこも中庭にあったのです。台所は、私達の住居の中にありました。物置部屋はありません。4部屋といっても、全部で3mの長さに14mの幅の、とても小さな住居でした。私たちは、折り重なって暮らしていましたよ。ひとりに1台のベットは当たらず、1台のベットに2人か3人が一緒に寝ていました。狭くても、労働者の生活世界では、こうして子供たちは大きくなっていったのです。私たち子供は、親にきちんとしたベットを買ってほしいなどとは言えませんでしたし、父の稼ぎでは、そんなことは不可能でした。

ヴェーバー通りは、クリント地域 *Klint* に属するのですが、そこにはまだ防空壕がありました。その防空壕の隣に新しく学校が建てられました。マグニ門 *Magnitor* か、エルシュレーガー *Ölschlüger* から旧市街の中へ入っていくと、シュロス通り *Schloßstraße* に来ます。そこからまっすぐ行くと、クリントです。まだ、ちょうどそこには、とても小さい木組みの家が3軒ほど残っています。この木組みの家は、道路から50 cm程の階段がついた、三階建ての簡素な建物でした。窓から上の家を見ると、上の家の中の人と握手できるほどに、息苦しくなるほどの小さな家でした。本当に古い木組みの家で、私がそこに住んでいた当時でも、少なく見積もっても、建てられてから200年はたっていたでしょう。このヴェーバー通りの家の住居は、とても悪かったのです。でも、シャルン通りの住居は、もっと悪かったのです。

シャルン通りの住居には3部屋あり、大戦中は、ここで暮らしていました。シャルン通りには、日当たりの良い、新しい家も何軒か建ちましたが、建築後数百年の、とても古い家々が並んでいました。私たちの家は、下側にありました。下側は、「ブラウネ・ヒルシュ」*"Braune Hirsch"*から始まり、13番、14番、15番、16番、17番、18番、19番、そして新築のヴォールマンズ・ゼーレ商店 *Wohlmanns & Seele* でした。私の家の1階には、喘息持ちの男が住んでいました。自然光が入らない家だったので、昼も夜もランプをつけていなければなりません。外灯もないし、自然光もまったく入らないので、長く住んでいた私でさえも、外から家の中に入って行く時には、両手を前へのぼして、何かにつかからないようにしたものです。外から家の中に入っていくと、廊下があって、この廊下が、いわば台所でした。この廊下にある台所は、窓もなく、まるで穴蔵のようでした。台所には、石炭用の竈がありました。とても旧式の壁にはめ込みの竈でした。褐炭コークスを煮炊きのために竈で燃やすのですから、もちろん、とても暑くなります。竈は、80 cm四方の箱型で、4本の脚がついたものです。中には、ロストルが付いています。その下に煙突管が付いていて、これがストーブとつながっているのです。7～8 mの長い廊下でしたが、実際には階段の踊り場で、ここに私たちの住居

に入るドアがありました。住居内に廊下はありませんでした。地下室の物置き場も屋根裏の物干し場もありました。トイレは、一階の、家全体の玄関の横、つまり家の廊下にあります。この家に住む住民全体で共用のトイレでした。

ここでは、家族は4人になりました。兄や姉が家を出て独立し、母は、その間に亡くなっていましたから、父と子供3人で住んでいたのです。

カスパリ通りの家は、築後30年か40年だったと思いますが、煉瓦造りの新しい建物でした。居間は、床から天井までの高さが、4mありました。暖房具はストーブでした。私は、一人暮らしの婦人が借りていた家族用住居の部屋の1室を又借りしていたのです。彼女は私の親戚でも、雇い主でもありませんでした。家賃として、20マルク払っていたと思います。大きな部屋でしたし、町中にあり、家具付きでしたから、そんなに高くはない家賃でした。この4階建ての家には、6家族が住んでいました。今は、この家のあった場所に飲み屋が入っていますが、昔はマイアー・ランプ店 *Lampen-Meier* でした。

私は、市の結婚登録所で結婚式を挙げた後、アオトア通り *Autorstraße* の一室に越してきました。そこに私の兄が、やはり又借りで、2室を間借りしていたのですが、引っ越しました。そこで、その後に入る者を探していたので、私たちが入居することになったのです。ここも年寄りの婦人が借りている住居の一室の又借りでした。

4. 旧市街の様相

私の妻が結婚前に住んでいたマウアーン通り *Mauernstraße* の外観は、もっともひどいものでした。通りは、今なら、車が1台かろうじて通れるくらいの狭さでした。マウアーン通り、シャルン通り、ウェーバー通りの家々は、一言でいうなら、南京虫の小屋みたいに見えたものです。本当にひどいものでした。マウアーン通りの家などは、曲がって傾いていました。左右の歩道も、今は昔の面影を残して、15cm四方の石畳で修復して、木を植えてい

ますが、当時は大きな石を置いただけの歩道でした。もちろん、子供の乳母車などを押して歩いたりはできませんでした。歩道は、上から下までゴミでいっぱいでした。昔のヴォル市場 *Wollmarkt* に敷かれていたような石畳などは、ありませんでした。それに、まともな道路もありませんでした。シュッペンシュテッター通り *Schöppenstedter Straße*、ウィルヘルム通り *Wilhelmstraße*、ファラスレーバー通り *Fallersleber Straße*、ハーゲン市場、ヴィント通り *Windstraße* には、厩付きの宿屋がありました。ブラウンシュヴァイクに市が立つと、周辺の村々から馬車に物を積んで売りに来た人たちが、ここに馬車をつないで、すぐに休むことができたのです。例えば、ファラスレーバー通りだけでも、31軒の飲み屋があつて、厩付きの宿屋も4軒ありました。市は、ヴェルダー、ハーゲン市場、それに一番大きなアイアー市場 *Eiermarkt* で開かれていました。村から馬車で出てきた人たちは、厩付きの宿屋に落ちついて、これらの市から市へと順番に、店を出していたものです。厩付きの宿屋の入り口の門のアーチは大きかったので、馬車も通ることができました。車は、中庭に置き、馬は厩へというわけです。このような厩付きの宿屋は、当時、ブラウンシュヴァイクに20軒ほどありました。当時のブラウンシュヴァイクでは、レッシング広場 *Lessingplatz* に売春婦が立っていたものです。

ベッケンヴェルカー *Beckenwerker* やランゲ通り *Lange Straße* 等の通りは、98%までが、壊れかかった、木組みの家でした。でも、当時、役所は整備するつもりはなかったのです。そこいら辺には、指物師が住んでいて、家の裏側に仕事場をもっていました。その他には、夜警や馬の仲買人等が住んでいました。当時、旧市街のマウアーン通り、クリント、ヴェルダー *Werder*、ニッケルンクルク *Nickelnkulk* といった居住地域は、だれでもが警戒したものです。そこには、人間を食べる奴がいる、と言われたものです。そういった地域だったのです。

人々は、退屈すると、家の中に居心地の良いソファーなどはありませんでしたから、家の前の玄関口のドアの前に椅子を持ち出して座ったものです。

そして、道の両側の住人どうして、おしゃべりをしたのです。どの家も1階か2階建てでした。マウアーン通り、シャルン通り、ヴェーバー通りには、高層の家はありませんでしたし、みんな壊れかかっていました。

5. 学校生活

私は、ブラウンシュヴァイクのマッシュ通り *Maschstraße* の国民学校に入学し、1919年に卒業しました。この学校は、俗に「木靴カタカタ学校」*Holz-schenklapperschule* と言われたものです。木靴というのは、ドイツ語で「エルベ川のはしけ(：どた靴)」*Elbkähne* と言われていますが、オランダ人が履く、あの木靴のことですよ。当時、両親は皮靴を履いてはいましたが、私たちには、親が、木で作ってくれた、あのエルベ川のどた靴しかなかったのです。上にベルトがついていて、これは、丁度、今はやりの健康サンダルのベルト位の幅で、足の甲の先の方にだけ掛かっていました。健康サンダルに似てはいますが、型はもっと原始的でした。つまり、きれいに仕上げもされていない、ただの板切れのようなものです。そんなものを父親が子供のために作ったのです。この板切れは靴屋で買うこともできました。冬の間も、この靴を履いていました。サンダル *Pantoffel* ともいいましたが、足の甲の上のベルトがカタカタととんでもない音をだしたものだから、「木靴カタカタ学校」と呼んだのですよ。当時、私が住んでいた処は、ベージンガー地域 *Bösinger* といって、住民は、みんな労働者でしたから、普通の靴を買うお金はありませんでした。父は、冬靴を買って与えるくれることなどできなかったのです。上の兄姉たちは、もう家を出てはいましたが、それでもまだ5人、6人、7人の子供が家に残っていたのです。

1915年の夏の間だけでしたが、ヴェーザーベルクラント地方 *Weserberg-land* のオッテンシュタインの国民学校に通いました。オッテンは、ヴェーザー川沿いのハーメルンの近くです。当時、私は11歳で、戦争中でした。冬になって、また、ここのマッシュ通りの国民学校に通いました。当時、実際的にはもう第一次世界大戦中で、食糧が不足していたため、農村部の人たち

が、私たちを引き受けてくれたのです。

学校では、よく殴られました。理由は、私は算数では学校でほとんど一番だったものだから、他の科目は、あまり勉強しなかったのです。マッシュ通りの時ですが、私は、他の生徒よりも一年間長く学校に行かなければなりませんでした。落第ということではなく、自動的に高等クラスへ行き、9年間、学校に通ったのです。フリッツ・ハルティエ *Fritz Hartje* という先生がクラスの受け持ちでしたが、彼は病気でした。彼は、肺病持ちで、だから兵隊にならなかったのだと、私たちは子供同士で言っていたものです。彼は算数の先生だったので、宗教や他の時間には怠けたのです。彼はいつも鉄パイプを持っていて、私は彼の前に出て、前屈みにならなければなりませんでした。昔は、子供達は実にしばしば学校で、折檻されたものです。毎日、何度もです。私などは、一日置きに折檻されました。殴られたり、怒鳴られたり、他の生徒の倍の勉強をさせられたり、翌日にみんなの前に立たされたりといった罰がありました。それは、ブラウンシュヴァイクでもオッテンシュタインでも同じでした。

オッテンシュタインでは、宗教の時間に罰を受けました。オッテンシュタインでは、私は、罰を受ける唯一の生徒でした。農民の子供たちは、両親に宿題をする時間を与えられていましたが、私には宿題やその他の勉強をする時間がありませんでした。私は、まだ子供だったけれど、里子でしたから、野良作業に出なければならなかったのです。1914年から19年まで、毎年、夏の5カ月間だけ、オッテンシュタインの学校に通いました。その他の期間はブラウンシュヴァイクの学校に通いました。だから、実際には1919年までブラウンシュヴァイクのマッシュ通りの学校に通ったということになるでしょう。

6. 子供時代の労働と遊び

私は、ブラウンシュヴァイクの学校時代は、パンや新聞の配達をしました。私がしない時は、他の兄弟姉妹がしなければなりませんでした。配達の仕事

は、ウェーバー通りに住んでいた頃の8歳か9歳くらいの時に始め、1914年にオッテンシュタインへ行くまで続けていましたが、登校前の1時間くらいのものでした。たくさん兄弟姉妹がいましたから、全員でお互いに交代して、パンと新聞の配達をしました。何人かがパン屋のパンを配達している間に、他の者は新聞を配達するというわけです。それから、当時、兄が小さな庭をもっていて、そのために手引き車を持っていました。今もありますが、当時、ルイ・フリッケ社 *Louis Fricke* が運送店をしていて、トゥルン・タクシス *Thurn & Taxis* と独占契約をし、郵送業を営んでいたのです。そこで、兄は、この手引き車を使って、この運送店の郵便荷物の配送の仕事を始めました。兄は手紙の配送は受け持つてはおらず、小包を手引き車に乗せて配達して回ったのです。私たちは、朝の登校前もですが、午後も、配送を手伝いました。プロイツェマー通り *Broitzemer Straße* のフリッケ社は、当時、馬車で運送していたので、馬を百頭以上も持っていました。私たちは朝早くに家を出て、その兄の手引き車を借り、馬糞を集めました。家庭菜園を持っている人たちに、この手引き車に一杯の馬糞を30ペニヒで売ることができたからです。

市が組織して、私たち子供はオッテンシュタインの村に送られたのですが、村の農家では、子供とはいえ、きびしい労働をしなければなりません。特に収穫時はきびしかったものです。10歳の時から夏場だけここで農業に従事しました。

オッテンシュタインでの仕事は、主に収穫と牛の世話です。牛小屋を掃除し、牛に餌を与え、乳搾りをしました。牛の世話は、とても時間がかかる、きびしい労働です。学校の生徒だった頃は、学校で過ごす時間以外は、毎日、朝の5時から給餌などの仕事をし、外が暗くなる、晩の8時まで働きました。学校の授業は、4時間制でした。計算してみると、朝5時から夕方8時まで15時間の内、学校で5時間過ごしたとして、10時間の労働でした。しかも、賃金は無く、ただ食べ物と飲み物と寝る場所だけを与えられたのみです。

私がオッテンシュタインで働かなくてはならなかったのは、食べ物と飲み

物と寝る場所を得るためでした。パンや新聞配達をしたのも、ほんの小遣い稼ぎですが、それも自分で使うためではなく、家族の家計費の足しにしたのです。配達で稼いだお金は、すべて親に渡しました。1ペニヒなりとも自分で自由にできるような余裕はなかったのです。子供がたくさんいる私たちの家庭では、飴を買うために1ペニヒ貰うということは、お金の1ペニヒではありませんでした。その1ペニヒは、商店が出している1ペニヒ分の青色の買い物引換券でした。「青色買い物引換券」と言われていましたが、この1ペニヒ分の引換券を母か姉から貰って、1ペニヒ分で、手に一杯のきいちご味の飴がきたものです。今どき、1マルクであんなにたくさんの飴は買えないでしょう。

私たちは、家では、家事などの仕事は、自分ができることは何でも手伝わなければなりません。私が10歳の冬に農村から戻って来た時は、じゃがいもの皮むきなどの他にも、何でも手伝いました。じゃがいもの皮むきということは、洗って、きれいにして、皮をむくのです。母が生きていた頃は、母が家事をし、彼女が亡くなって後は、グレーテが主に家事をしていました。グレーテは仕事をしていましたから、家に帰ってくると、手伝うように言われたのです。他の子供達も手伝いました。

私の子供時代は、遊ぶために自由になる時間は、ほとんどありませんでした。夏のいちばん素敵な時期は、農村ではもっとも忙しい時期でしたから、遊ぶ時間は、まったくありません。仲間たちは、野良で遊んでいましたが、私の農家の主人は、「さあ、1時間くらい時間をやるから、仲間と遊びに行っておいで」などとは言ってくれませんでした。

ブラウンシュヴァイクの家にはいた時は、外の道路へ遊びに出ました。それでも、同年代の子供たちに比べると、遊び時間はずっと少なかったのです。遊び時間が少ないことを悲しいなどと思ったこともありません。遊びということを知らなかったのですから、比較することもできなかったのです。それに、私たちには、砂場などのある公園などありませんでした。ウェーバー通りには、何もありませんでした。ベッカー通り *Bäckerstraße* やシャルン通り

に遊び場はないし、そこら辺の通りはどこも石が敷かれていましたが、中庭もなかったし、通りで遊ぶより仕方なかったのです。そこら辺一带は旧市街で、住民はみな子供の多い家族でしたから、住民政策として、そのような造りだったのでしょう。子供の多い家族は、旧市街に住んでいたのです。

遊び仲間の子供は、特定のきまった仲間がいたというわけではありません。丁度、その時に通りに居合わせている子供と遊んでいましたが、家に兄弟姉妹もたくさんいました。親戚の子供たちもいました。学校と一緒に通ったり、顔見知りの子供もいました。

通りでは、禁じられている遊びは何でもしました。たとえば、ファウスト・バルです。ファウスト・バルは、サッカーではありません。それに野球に似たゲーム *Schlagball* もしました。1階の家々は、窓の戸を閉めたものです。太い棒でボールを打って、打ったら、ゴール地点まで走らなければなりません。それから、ビー玉遊びもしました。私たちは、当時、とても大きなニッケル製の玉を持っていました。それがブラウンシュヴァイクのどこから手に入れたものか、覚えていません。ここいら辺には大きな工場があり、それらのビー玉は、はね物でした。その玉は、とても重かったのですよ。みんながこれで遊ぼうということになると、ヴェーバー通りは石敷きだったので、転がりませんから、他の通りへ行かなければなりませんでした。キュッヒェントヴェーテ *Küchentwete* とカフェートヴェーテ *Kaffetwete* を通り抜けて行くと、シャルン通りに出ます。ここはアスファルト舗装されていましたから、うまくビー玉遊びができたのです。車も通ってはいませんでしたし、だれにも邪魔されずに、通りをぜんぶ独占して遊びました。

7. 職業

私は、1919年に学校を卒業しましたが、そのまま、何の職業教育も受けずに、「下男」として、子供時代から行っていた、オッテンシュタインの農家に行きました。この農家で、学校を出た年の15歳から18歳まで働きました。つまり、1919年から1922年までの3年間です。しかし、その間にそんなこと

をしているのが、ばかばかしいと思えました。戦争中ならいざしらず、きちんとした職業につくつもりなら、ここで永久に下働きをしてはいられない、と考えたわけです。それで、1922年にオッテンシュタインを出ましたが、その後、仕事がありませんでした。

それで、私は1922年10月に、デュッセルドルフへ行きました。第一次大戦後、デュッセルドルフはフランスに占領されていて、当時、「占領地区」とか何やら変な名前がついていました。ちょうど今の東ドイツのようなものでした。特別なパスポートを申請すれば、行けましたが、私たちは当時、ラインラント州 *Rheinland* には行けませんでした。私がパスポートなどもらえるはずがありません。それでも、デュッセルドルフ近郊のリヒテンブロイヒ *Lichtenbroich* に義理の兄がいて、彼に、手紙を書いたら、「お前に仕事をやるから、来ても良い」ということだったので、私は行ったのです。そのラートヒンゲン *Rathingen* の製鉄所で義兄が働いていたので、私も仕事に就くことができましたのです。この義兄の家に住んで、夏が始まるまでの7カ月間、23年の4月まで、そこで未熟練労働者として働いたのです。しかし、嘘は言いたくないので、本当のところを話しますが、ヤミの仕事でした。つまり、不法就労です。当時は、そんなものでした。7カ月間、この製鉄所で働いたのですが、きつい労働でした。この製鉄所は、大きいネジ釘とボルトを製造していました。昔、送電線の鉄塔の絶縁体に覆われていた、あの大きなボルトを、そこで私たちがつくっていたのです。二輪手押し車でまだ真っ赤に燃えているネジ釘をシャベルですくって、リベット・プレス機まで運ばなければならぬのです。その後は、すべて自動的に生産されるのです。手押し車を傾けて、プレス機の前にネジ釘が吐き出されると、真っ赤なままで雌型に入れられます。とても大きな歯車に雌型がついていて、それにネジ釘が押し入れられるのです。そうするとすぐに、もう出来上がって、出てくるのです。私は、ずっと7カ月間、この真っ赤に燃えている鉄を運ぶ仕事をしたのですが、この仕事に嫌気がさしました。それで、バート・オインハウゼン *Bad Oeynhausen* に行きました。その缶詰工場のシュマルバッハ社 *Schmalbach*

で、1923年の夏から、冬まで缶蓋付工として働きました。

その後、給仕人としての職業教育を身につけるために、1923年からブラウンシュヴァイク中央駅のレストランに見習い修業に入り、25年に見習いを終えましたが、1931年までの6年間、一人前の給仕人として、同じレストランで仕事を続けました。その後、ブライテン通り *Breiten Straße* の「グロトリアン・シュタインヴェーク・ザール」という店に移りました。持ち主がグロトリアンという名前だったので、私たちは、このように呼んでいました。この店は、正面部分が狭いレストランで、中庭をつき抜けて行くと、ゲルデリンガー通りに沿った位置にホールがありました。ここで7年間、1938年まで、働きました。持ち主が、このレストランを息子に譲ったのがきっかけで罷められました。今度は、公園の端のヘアツォーギン・エリザベート通り *Herzogin-Elisabeth-Straße* の「プリンツェンパーク・ガストシュテッテ」の主人と仲が良かったので、彼のもとで5年間、1943年まで働きました。それから、大変で、プリンツェンパーク・ガストシュテッテから兵隊に行ったのですが、その間に他の仕事もしました。1950年に、仕事を変えたいと考え、職業安定所に行ったら、職員がビュッシング社 *Büssing* の仕事を紹介してくれて、運のよいことに習熟缶蓋付工として採用され、給仕人としての職業生活は終わりました。そして、1969年から年金生活に入っています。

1920年代にヤミで働いたことはあるけれど、実際上は、失業していたことはありませんでした。だから、二人の義兄の助けもありましたし、結婚後に一度だけ失業していた時期はありますが、いつも、自分のことは自分で始末するように努力していたので、私は失業手当を受けたことはありません。

8. 親子関係

両親にひどく怒られたり、ひどく殴られたりしたことはありません。父には、平手打ちを喰らいましたが、ふつうは、殴られるのは学校でです。父は、何かの道具を使って、それで殴ったりはしませんでした。母も同じです。布団叩きなどを使って殴ったりもしませんでした。多分、家には、布団叩き

などもなかったのでしょう。木靴を壊したら、革ベルトを止めるために、青い鋏を打ちつけなければなりません。そういう時には、母にも平手打ちをお見舞いされました。父から最後のびんたを喰らったのは、私が小さな子供の5歳くらいの時でした。

子供時代、両親と個人的な悩みについてなど、話し合ったことは、まったくありません。家では、いつも小さな空間に大勢が暮していたのですから、そんなことを話し合うことはできなかったのです。母のことはあまり良く知らないのですが、比較できませんが、父との生活の方が長かったのも、母よりは、父の方がより良く理解し合った、としか言えません。家では、両親や兄弟姉妹から性について説明を受けたこともありません。大きな子どもたちは、もう家を出ていましたし、私たちはまだ小さくて、お金のことなど分かりもしませんでしたから、両親は、お金が無くて困っていることなどについて、子どもには話しませんでした。父は、ずっと後に、私に、当時の家の経済状態を語ったことはあります。

9. 結婚

妻は、シャルロツテという *Charlotte* という名前です。1907年12月30日にブラウンシュヴァイクで生まれました。私と妻は、妻が19歳の時、1926年に、妻の母の従兄弟の銀婚式の祝いの時に知り合いました。その後、しばしば逢って友人関係ができて、1928年からお互いに結婚を意識して付き合いました。1929年に婚約し、1931年9月12日にブラウンシュヴァイクで結婚しました。妻の前に他の女性と婚約したことはありません。妻も他の男と婚約したことはありません。初恋で唯一の恋愛でした。

子供は3人います。長女のエディット *Edith* は、1939年5月22日に生まれました。次女がベルベル *Bärbel*、それに長男がいます。下の2人の誕生日は忘れました。妻は、結婚当時、まだルター派教会から脱退はしていませんでしたが、教会で結婚式は挙げませんでした。私たちは、1929年から2年間も婚約期間がありました。婚約はすんなりと決まったのですが、妻の母が、給

仕人などを職業にしている男を婿にしたくなかったので、私との結婚を喜ばなかったからです。それで、もう我慢できなくなって、3度目の申し込みをし、14日以内に結婚しなければ、もう終わりにする、と迫りました。当時は、給仕人や楽士や運転手というのは、何もかも十把ひとからげに扱われたものです。

私は、職業柄もあって、生活態度が安易な人間でした。そして、時には、たくさんの金を稼ぎました。当時、すでに建てようと思えば、家を建てるだけ稼いでいたのですが、何度も何度もその金は使ってしまいました。1928年に限ってみれば、仕事場の中央駅から、彼女が住んでいたマウアーン通りまで、距離は全然遠くもないのに、フリードリッヒ・ウィルヘルム広場 *Friedrich-Wilhelm-Platz* からタクシーに乗って行ったものです。そうやって彼女を家から連れ出しに行ったのです。私は、めかし込んで出かけました。その辺は、とても貧しい通りでした。その後の時期には、私はタクシーをファラースレーバー通りで降りて、徒歩で彼女の家まで行きました。それというのも、私の当時の中央駅レストランの主人が匿名の手紙を受け取ったからなのです。私が晩の8時にタクシーを乗りつけて、彼女を迎えに行くと、近所の者がとても妬んだのです。それでも私たちは、遊びにでかけました。

当時、妻も女工の仕事に就いていましたから、朝、仕事に行かなければなりませんでした。だから夜中の12時か1時には家に帰りました。彼女の家のドアが開かれると、彼女の母親がドアのすぐ後ろに箒を持って立っていると知っていましたから、私たちは、いつも彼女の家の2軒先で別れました。私たちは、もう大人でしたが、彼女の母親が付き合いを認めなかったからです。彼女の二人の弟妹は、何でも好き放題できましたが、彼女だけはいけなかったのです。28年から29年にかけての冬は、とても寒い冬でした。当時、私は、駅のホームにあったパヴィリオンの中で働いていました。ここでは、ビールとグロッグ（：ラム酒に砂糖を加え熱湯で割った飲み物）と茹でソーセージしかなかったのですが、それでも大繁盛でした。毎朝、7時半の仕事開始でした。日曜日には6時始業でした。朝来るやいなや、中にへばりついていま

した。それほどに繁盛していて、カウンターにの前に立ちっぱなしでした。そんな状態でしたから、妻も夜や日曜日に、時々、手伝ってくれました。当時、私は毎日、今の給仕人が稼ぐよりも、多く稼ぎ、毎朝、州貯金局に10マルクずつ、貯金しに持っていったものです。貯金局は、丁度、駅への通り道にありました。そして、20マルクか39マルクは飲んでしまいました。39マルク以下の稼ぎだった日はありませんでした。でも、これも、この年のことだけで、私の給仕人生活全体を通してのことではありません。間もなく、株が暴落し、恐慌になりましたが、この貯金は払い戻すことができました。この年、私は24歳で、妻は22歳でした。私は、結婚した時は、27歳でしたから、結婚まで3年、待ったわけです。

結婚前、妻は、マウアーン通り34番に母と4人の弟妹と一緒に住んでいて、さまざまな仕事に就きました。彼女の父親は1914年に亡くなっていて、母親は障害者でしたから、一家の稼ぎ手として、働かなければならなかったのです。母親思いでしたから、こういった事情も結婚を躊躇する理由だったようです。彼女は最初は、1920年代の若い時に、ヘルムシュテッター通り *Helmstedter Straße* のダウベルト缶詰工場で、その後は、ファラースレーバー通りの段ボール製造のヘルムホルト社 *Helmhold* や、同じ通りのゴム会社のハーゲマン社 *Hagemann*、で仕事をしました。仕事がない時は、またせつせと仕事を探しに通ったので、すぐに次の仕事口を見つけたということです。14歳の時に、靴屋の家事手伝い仕事もしています。その他には、結婚後、ちょうど私が失業している時に、フィーヴェーク通り *Viewegstraße* のフランク・ハイデッケ社 *Frank & Heidecke* でも1931年から半年だけ、働きました。住んでいた家の隣がフランク・ハイデッケ社だったので。

9. 性・避妊

家では、両親や兄弟姉妹から性について説明を受けたことはありません。性については、だれかにそっと教えられたのです。そっと教えてくれたのは、兄弟姉妹ではなくて、オッテンシュタインの学校で見知っている、よその子

供でした。10歳か11歳頃のことですが、村で動物の性器を見ました。戦争中で、農民の息子達は戦争に行っていました。年寄りも、主に畑で仕事をしなければなりませんでしたが、ある時、仕事の手を休ませても良い時のことでした。その子供が、牛と豚を引いて、近寄ってきたのです。

私にとって、妻は、結婚相手として真面目に付き合った、最初の女性ですが、はじめての性体験を共にした女性は、未亡人の女性でした。22歳の頃のことです。初めて女の子にキスをしたのも、やはり22歳の時、同じ女性とです。彼女は中央駅レストランで働いていて、私よりも2歳年上でした。このことは、妻も後に知りました。私は、妻と婚約した後も、彼女の許に行きました。私と彼女は一緒に職場で働き、終業時間も同じでしたから、一緒に夜中の1時に仕事を終えたら、そうなるのも当然でした。もう終わったことです。

私には、3人の兄弟、3人の姉妹、一人の異母兄、4人の異母姉がいます。両親には大勢の子供がいましたが、避妊具を使用していたのかどうかは分かりません。しかし、当時、避妊具としては、ゴム製品があったわけです。もし、使っていたとしたら、母は、きっと7人もの子供を生んではいなかったでしょう。当時、ゴム製品があったところで、みんな、それを買うだけのお金がなかったのですよ。それに洗浄具もあったでしょうが、それだって買うお金はなかったでしょう。父が、途中で止めることができたなら、12人も子供を作らなかつたことでしょうから、両親は、何の避妊もしなかつたのでしょうか。

私は給仕人でしたから、毎日、夜まで働かなければなりませんでしたが。給仕人の一日の仕事は長すぎて、家族生活などはないのも同然でした。仕事は、朝の9時から夜中の2時まで続き、その後、仲の良い同僚と一杯やったものです。それに、復活祭や聖霊降臨祭やクリスマスのような祝祭日も、仕事をしました。しかも、これらの祝祭日には法定の閉店時間は大目に見られて、ないのも同然で、閉店時間は大幅に延長されたのです。私たちは普段よりも長く働かねばならず、お客たちも長く飲み屋に居座っていることができたとい

うわけです。だから、私たちは、クリスマスの第一週目の祝日や大晦日には、全然、家に戻りませんでした。朝、トイレでちょっと顔を洗い、そのまま仕事に就いたものです。私たちの娘のエディットが生まれたのは、1939年でした。私たちは、8年間も、一緒にバットへ入る時間を持たなかったのですよ。簡単な理由からです。私は、家に帰ってくると、もうすでに体中にアルコールがいっぱい回っていて、不可能だったからです。私の同僚たちと一緒に飲む時など、彼らはガールフレンドを連れてきていることなどもありましたが、私は、ビールを飲む方を選んでいました。それに妻は、フランク・ハイデック社へ働きに行っていましたから、朝早くに起きるので、ぐっすり眠っていました。だから、私の目が覚めて、ひょっとしたら出来るかもしれないとも、その時には、妻はもう朝5時に家を出た後でした。そんな風に8年が過ぎたのです。私たちの場合は、当時、子供をつくる機会がほとんどなかったということです。他の同僚の家でも多分、そんな風だったのだらうと思います。

彼らと避妊について、話したことはありません。同僚たちには、ガールフレンドがいました。この仲間たちと一緒に飲みに出かけると、彼らはガールフレンドを、その場に呼んだりしたものです。8人で一緒に出かけると、一人が映画館に行き、もう一人が他のどこかへと消えます。そうすると、残った私と他の仲間がビールを飲みます。その場で、ガールフレンドと一緒に仲間が、その彼女に「映画館へ行っているよ。その後で、どこそこで逢おう」などと言うのですが、そんな時でも、避妊方法等については、話したりはしませんでした。昔は、避妊法についても、口から口へと囁き声で、教えられたのもです。子供が生まれながらに体得するように、何となく知るものです。今日では、性教育があって、啓蒙されますが、私たちには、だれもきちんと教えてはくれませんでした。啓蒙書などを読む暇もありませんでした。電灯がなかったので、昼間しか本を読めませんでしたが、昼間は働かなければなりません。避妊具についても、口伝えで知りました。講演会などで啓蒙されたわけではありません。私の場合、どんな風に知ったかという、友達がどこかへ行って、「おい、トイレの中へ行ってみろよ。そこに箱がある

から、1マルクを入れたら、2、3個出てくるぞ」という調子でした。結婚前に付き合った未亡人の女友達とは、彼女が「私は子供が出来ない体なのよ」と言ったので、避妊具なしで射精しました。当時、私の近所や親類縁者の中で妊娠中絶をした人がいるなどということは、聞いたことはありません。

10. 宗教・政党・労働組合

〈宗教〉

私と妻は、二人とも洗礼は受けています。私は1919年にブラウンシュヴァイクで堅信礼を受けました。他のどの兄弟姉妹も堅信礼を受けています。兄弟姉妹の中に、堅信礼の代わりに青年式を受けた者はいません。私がまだ旧市街のカスパリ通りに住んでいた頃に教会税の問題が occurred。当時の教会税は、たしか1年に8マルクでした。私は、金は十分に稼いでいました。若かったし、仕事が1時から1時半に終わった後に、まだ何杯か飲んだものです。他の同僚だって、だれも教会税のことなんて考えませんでした。私の下宿のおかみさんが、「Cさん、もう教会税を払いなさい。役人が差し押さえると云ってたわよ」と何度か私に言ったのです。私はそれに対して「あー、もちろん、払いますよ」と返事をしました。毎度、その度に税務署に行こうと思ったのですが、いつも忘れてしまいました。それで、ある日、家に帰ってみると、「ほら、みてみなさい。だから、私が言ったのに。少し前に、執行吏が来て、あなたの黒の背広を差し押さえていきました。」とその老婦人が私に言いました。「なんてことをしてくれたもんだ。明日、すぐにでも取り戻してきますよ。」と私は言ったものです。黒の背広は、給仕人にとっては仕事着ですから、すぐ翌日に8マルクを払って取り戻してきましたが、即刻、教会から脱退しました。だから、私は、結婚した時、「教会とはもう関係するつもりはないよ。教会で結婚式はしないよ。君も教会を脱退するんだ」と妻に言いました。

〈政党〉

父は、古参の筋金入りの社民主義者でしたが、家では、政治について議論

したことはありません。両親の家では、SPD の『フォルクスフロイント』“*Der Volksfreund*” を購読していましたが、当時、父が労働組合の機関誌を受け取っていたのかどうかは、分かりません。カスバリ通りの独身時代は、私自身は、新聞の自宅購読をしていませんでした。当時、見習いとして勤めていたレストランに色々な新聞が置いてありましたから、それを読むことができたのです。だから、結婚してはじめて、新聞を自宅購読しました。

父は、エルンスト・アウグスト公爵 *Herzog Ernst-August* を良い人だと思っていましたから、私も子供の頃、エルンスト・アウグスト公爵を良い人だと思っていました。父がその他に尊敬していたのは、アウグスト・ベーベル *August Bebel* とブラウンシュヴァイクのハインリッヒ・ヤスパー *Heinrich Jasper* でした。ヤスパーの記念碑は、ボールヴェーク *Bohlweg* にあります。その他に父がどんな人物を尊敬していたのかは、知りません。20年代に給仕人をしていた時代、私は、ナチスに殺された編集者で労働組合活動家のティーレマン *Thielemann* も尊敬していました。父も彼を尊敬していました。彼らと個人的な知り合いではありませんでしたが、ヤスパーとティーレマンをレストランで見かけたことはあります。

シェッペンシュテッター通りにあった「シュタット・ヘルムシュテット」は、共産党員の集まる居酒屋でした。私のもっとも仲の良い友達が共産党員でした。同僚の一人もそうでした。この同僚とは、兵隊の時に、ジーメンス社 *Siemens* で一緒に働いたのですが、戦争後、彼は、イギリス人と町中を車に乗って回り、「そこにナチが住んでいる」「そこにもナチが住んでいる」と言って、ナチスの同僚の住む家を教えたのです。彼は、共産党員として、ナチスの同僚すべてを密告したのです。私たちもナチスの同僚を知ってはいませんでした。私はナチではなかったけれど、共産党員でもありませんでした。私は、ナチの突撃隊 SA に入っていたことがあります。入らなければならなかったからです。当時、私はフリードリッヒ・ウィルヘルム通りにある、今は中国レストランの「プフェルデシュタル」*Pferdestall* になっていますが、「プショルプロイハウス」*Pschorrbräuhaus* という居酒屋で働いていました。ここに、

NSKK、つまりナチスの運転手軍団が出入りしていました。アーラー・スターラー・ビール会社のビールを出している居酒屋の代表者たちも出入りしていて、ヘルマン・ヤーコプスが、その一人でした。彼が、私たちも入るべきだと言ひ、私は、拒否したのですが、主人の息子が私も一緒に SA に加盟申請してしまったというわけです。SA には奉仕活動というのがあり、奉仕計画書が自宅に送られてきました。以前、ヴォルフエンビュットラー通りに、「ホルツガルテン」*Holzgarten* という有名な寄席がありましたが、そこで「奉仕活動をせよ」という通知書を受け取ったのです。それには、「8時から何時まで奉仕活動。つまり SA 奉仕活動」と書かれているのですが、もちろん、私は行きませんでした。私は、夜も働かねばなりませんでしたが、幸いにも奉仕活動などでできず、身を引いていることができたのです。2度目の通知書の後、店にヤーコプスがやって来て、主人に苦情を言ったのですが、「ヤーコプスさん、よくお聞きなさい。あなたが、私たちを加入させたのですよ」と私は彼に言ってやりました。そうすると、「それじゃあ、替わりの従業員を雇えばよいのですよ」と彼が私に言いました。そこで、私は、「それでは、その替わりの従業員の給料を私が払うのですか？」と彼にきくと、「そうですよ」と彼は答えたのです。そこで、私は彼に「あなたは、そんなことばかりを考えているのですね」と言って、奉仕に行きました。3度目には、SA に行き、ヤーコプスが私に言ったことを SA の幹部に説明しました。すると、「奉仕活動に來なくてよい」と言われたのです。奉仕活動をして、しかも、一介の雇われ人なのに、その間の替わりの従業員のための給料まで支払うなんて、冗談ではありません。ヘルマン・ヤーコプスは、そんな男でした。ブラウンシュヴァイクのもっとも有名な居酒屋経営者でした。

エルンスト・アウグストが退位して、アウグスト・メルゲス *August Merges* が、入城しました。彼は、私たちに約束したように、城の食糧貯蔵庫が空になるまで、首相の地位にとどまりました。城の食糧貯蔵庫が空になったら、みんなは彼を追い出し、彼は城から出ていったのですよ。母はもういませんでしたが、私たち子供は、1919年に城の大きな建物に続く階段を上がって、

大きな広間にまで入って行きました。大広間のテーブルの上には、たくさんの食べ物が出されていて、私たちは、ココア、チョコレート、本物の砂糖菓子などを貰いました。そんな菓子類はまだ知りませんでした。子供の私たちは、ズボン吊りなどのちょっとしたプレゼントも貰いました。プレゼントを貰うと、脇のケーキのある場所へ行くのですが、そんなに速くは食べられないので、ケーキをたくさん手に取り、紙で包んで、下に降りて、兄や姉たちにあげました。そうすると、もう一度、列に並んで、城の食べ物が無くなるまで上に行つては、同じ事を繰り返したのもです。もし、こんなにたくさんの食糧品がブラウンシュヴァイク外から取り寄せられた物でないとしたら、公爵は、まったく卑劣な人間でしたよ。とにかく、城の食糧庫が空になるまでプレゼントし続けても、メルグスが4週間も持ちこたえられるほどに多量の食糧を、公爵が自分一人のために、城に貯蔵していたのですから。市内の子供達全員を、少なくとも、数週間も養えるほどの量だったのですから、とにかく、膨大な貯蔵量でした。何度、行つてもよかつたので、私たちは、数週間の間、何度も城へ行つて、そういった物を貰ってきました。私は、いつも、兄か姉と2人で行きました。貰つたケーキを彼らにあげて、コーヒーやココアは彼らも一緒に飲んでもよかつたのです。そして、プレゼントとケーキを兄や姉に預けると、また後ろに並んだものです。プレゼントは、ズボン吊りや本でしたが、石板などのまだ知らない物も貰いました。最後には、首相とグローテヴォール *Grotewohl* 等の彼の同僚も顔を見せました。グローテヴォールは、ブラウンシュヴァイクのホールヴェーク *Hohlweg* に、泉の横の、今は居酒屋になっている場所ですが、ここに竈をつくる工場を持っていました。彼らはその後、東側へ行つてしまいましたが、みんなブラウンシュヴァイク出身なのですよ。

〈労働組合〉

当時の私自身が、社会のどの層に属していたかと尋ねられたら、即座に「労働者階級」と答えます。私の家族は、もっと下の階級に属していました。その理由は、私も一緒に働いて稼いでいたので、言っても良いでしょう。つま

り、私の家族は何も所有していなかったからです。いつも腹をすかせていました。私たちが買ってきたソーセージの切り屑がなくなると、たった一枚の乾いた古いパンがあるだけで、それを湿らせ、少しだけその上に砂糖を振りかけて食べるのです。戦争中だけではなく、戦争前の時代もです。本当に貧しかったのです。私の家族は、普通の労働者の生活水準に比べても、ずっと貧しかったのです。大勢の子供がいたからですが、子供の私には、家が貧しいのだということは、理解できました。一緒に遊ぶ子供たちの家が、私の家よりも上だということに、気付いていました。子供が一人か二人の家の子供たちは、「いいや、僕たちは新聞配達をしなくてもよいのだ。僕たちは、肉屋へソーセージの切り屑を買いに行かなくてもよいのだ。母さんが買いに行くから。」と言いました。そういうことから、気付いたのです。

労働組合には、1927年から入っています。だから、私は今まで55年間、労働組合員ということになります。スポーツ・クラブ等には参加していませんでした。最後はデュッシング社だったので、金属産業労働組合 *IG-Metall* でしたが、最初の労働組合への加入当時は給仕人でしたから、一般自由労働組合の食品・嗜好品・食堂労働者同盟に所属しました。食糧・嗜好品・食堂労働者連盟には、私が良く知っている数人の仲間が入っていたので、私も誘われてそこに加わったというわけです。彼らは、職場の同僚で、みな男性です。労働組合からの公的な誘いによって、入ったというわけではありません。労働組合からの誘いはありませんでした。同僚達が、「お前も組合に入れよ」と言うので、私は、自分で組合の事務所に行って、加入手続きをしてきました。労働組合の役員になったことはありません。企業内経営協議会の労働者委員 *Betriebsratmitglied* や会計係のような役にも就いたことはありません。

11. 祝い事・余暇

両親の家での祝い事は、結婚式だけでした。子供の頃は、家では、クリスマスも誕生日も祝いはしませんでした。クリスマスは、習慣からではなく、

偶然からだけ祝ったものです。例えば、だれかが、「僕の家においでよ」と言うと、「じゃあお前の家に行くよ」という具合に約束して行って、一緒にクリスマス祝ったのです。当時、私はそんなクリスマスの祝いをするということすら知りませんでした。復活祭の祝いもメーデーの祝いもありませんでした。母が亡くなって、私が3歳か4歳の頃、当時、私の姉のグレーテが、女性寮の「マリーエンハイム」に住んでいたのですが、そこで始終、祝い事がありました。姉がクリスマスにそこへ連れていってくれた時の写真がありますが、私の髪はカールした金髪で、長かったのです。とても嬉しかったことを覚えています。まだ小さい私が、女性たちがお祝いをしている場で、クリスマス・ツリーの下に座らされ、キリストの役を演じたというわけです。だから、このクリスマスは、強烈に記憶に残っています。

祝い事はしませんでした。クリスマスのプレゼントに、いつも上の子供からその下の子供に玩具のお下がりが回ってきました。クリスマスのお古のプレゼントは、いつも数個の積み木でした。その積み木のプレゼントを使って、兄弟たちと一緒に積み木遊びができるのが、とても嬉しかったものです。

少年時代に楽しかったのは、歳の市やサーカスでした。父は、仕事がない時は、いつも家にいました。党の集会などにも行ったことはありません。仕事から帰ると、のんびりと葉巻を吸うのが楽しみでした。貧しくて子供の多い家ですから、母にはのんびりとする暇などありませんでした。

私達たち子供が父と散歩をするというと、日曜日にヴォルフエンビュッテルへ歩いて行ったものです。そして、行程の最後に、森の中の「シュタインホルスト」というレストランに行きました。レストランでは、子供が大勢でしたから、私たちは他の客のようにテーブルにはつかず、両親だけがテーブルにつきました。子供だけで遠足に行ったりはしませんでした。当時、学校の遠足では、両親も日曜日に一緒に行ったものですが、こういう機会をよく利用しました。歩いている途中で飲むために、コーヒーなども持参しました。両親は、子供達をみんな連れて参加し、他の家族も一緒に行きました。

両親が、余暇に、日頃からよく付き合っていたのは、近所の男の人ばかり

でした。つまり父の付き合いです。当時、親戚付き合いはありませんでした。両親と一緒に飲み屋などへ行く事はありませんでした。1日に20マルク金貨以上の稼ぎをした時だけ、父は飲み屋へ出かけました。父は、10ペニツヒ硬貨を1個か15ペニツヒ余分にもっていると、土曜日に飲み屋へ行って、ビールを1瓶、飲んだのです。その飲み屋は、今日、まだシルト通り *Schild Straße* にあります。蒸留所だった店で、立ち飲みをさせていたのです。そこでは、まず蒸留酒の小瓶をもらうのです。当時、この蒸留酒の小瓶のことを、「アハティエ」*Achtje* と言ったものです。これを飲んでから、瓶入りのビールを飲むのです。両方で15ペニツヒだったのです。この飲み屋に父と同じ年代の人たちが出入りしていて、いつもここで彼らと逢っていたのです。仕事関係の同僚ではありません。この飲み屋は、労働者の居住区にあり、客は、みんな労働者でした。つまり、労働者の集まる飲み屋でした。しかし、いつもよりも余分に稼いだ時だけで、他には飲みには行きませんでした。もう、よく覚えていませんが、父は、当時、葉巻職人として、12人を週17マルクの稼ぎで養っていたのですから、大変でした。20年頃の父の稼ぎは、週に20マルクでした。その額は金貨1枚分で、それでも彼は喜んでいたものです。その時は、まだ紙幣ではなくて、金貨でした。1920年から21年にかけて、すでにインフレの時期に入っていました。23年には、インフレが最高潮に達したのです。

オッテンシュタインとデュッセルドルフから戻って給仕人の仕事をしていた時期には、私は、週に一度、ケーゲルに行くくらいのものでした。親の家を出て、カスバリ通りに住んでいた時は、仕事から、朝から夜中まで働いていましたから、遠足になど行きませんでした。休みの日ができると、風呂屋に行き、床屋に行き、ケーゲルに行きました。それだけで、一日は終わりです。大人になって、20歳の頃は、いつも働いていなければならなかったのです。歳の市もサーカスも関係ありませんでした。どの祝日だろうと、逆に2倍の時間働かなくてはならなかったのですから、他の人々とは、まったく逆でした。ケーゲルには、2週間に一度は、男たちだけで行き、その次の週には妻同伴で行きました。そうして、夫たちも妻たちも酔っぱらって、朝方、家に

帰るのです。夫だけが酔っぱらっていたわけではありません。

私自身は、仕事場以外では、居酒屋へ飲みには行きませんでした。ただ、昔は、妻と一緒にダンスを踊りに、ブリュニングス・ザールバオ *Brünnings's Saalbau* には、行きました。あの大きなレストランには行ったけれども、ただビールを飲むだけのためには、他のどこにも行きませんでした。私はビールを一杯だけ飲んでも、飲んだ気がしないのです。だから、すぐに二杯目をのみ、またさらにもう一杯ということになって、気がついた時は、もう遅すぎるといことになります。だから、飲み屋には行きませんでした。